

平成18年 7月10日

ヘルパーステーションだいとう ケアレポート No 7

ヘルパーステーションだいとうのケアレポートNo 7をお届けします。
今回はヘルパーによる服薬援助について考えてみます。

高齢者の服薬に関しては、自己管理が困難な状況がしばしば見受けられます。一般的に薬の種類が多いことが主因ですが、複雑な服薬方法を理解しにくいことや薬の名称や形状による識別もなじみにくいようです。認知症でなくても支援が必要なケースもあります。

私どものヘルパーステーションのご利用者の内、個別援助計画で服薬援助が位置づけられているケースは 17人/220人中 です。計画に正式に位置づけられておらず一般的な注意として支援しているケースを加えればさらに増えますし、家族による支援も多くあります。以下に私どもの経験による服薬支援のポイントを考察してみます。

現場のヘルパーにマニュアルとして注意を促し確認している点は、

1. 薬の種類。
内服薬、外用薬に分かれますが、裸錠、糖衣錠、カプセル、顆粒、液剤、チュアブル、また、軟膏、クリーム、スプレー、パウダー吸入剤、貼付剤、点眼、点鼻、座薬などに加えて処方薬以外の売薬、サプリメント等
2. 服薬方法。
朝、昼、夕、眠前、食前、食後、食間などの服薬のタイミング。糖尿病薬に代表される食物との関係。
3. 薬の作用の観察と報告。
副作用の出現。緩下剤、利尿剤など排泄の状況の変化。解熱、鎮痛、ぜんそく発作、かゆみの軽減等の効果出現。

これらの点に注意しながら処方どおりにきちんと薬を飲むことが基本です。しかしながら現場では様々なことが起こります。

4. 利用者が処方と違った服用をする。(認知症によることもある)
利用者が服薬を拒否する、一部を拒否する、多く服用しようとする。
5. 利用者も援助者も服薬方法が判らなくなる。
最新の薬袋を廃棄し、処方が判らなくなる。検査の結果や症状の変化によって投薬期間の途中で服薬方法が変わり、その情報が十分に伝わらず混乱する。薬の追加や頓服薬(一時的な風邪症状等のため)の処方などによる混乱。
6. 薬の管理方法が問題。
なぜか(本当は処方どおりに服用していないことが多い)薬がたくさん余っており、古い薬からのむのでいつも古い薬をのんでいる。保管状態が悪く見るからに薬効が劣化している。シートを1錠ずつバラバラにするので残薬の状況が判らない。
7. 服薬時間が過ぎた薬が残っている。
ヘルパーが訪問すると薬が残っており、本来の服薬時間が大幅に過ぎているが、この薬はのむべきか、廃棄すべきか判らない。

8. ヘルパー自身が把握できていない。
ヘルパー自身が目の前の薬が何であるか理解できていないので上手く報告できない。（「白い小さな丸い錠剤が残っています・・・何か判らない」）

その他にも問題があります。

9. 利用者やヘルパー等に薬の知識が十分でなく、思いこみから危険を招く。
ニトログリセリンの貼付薬を単なる痛み止めと理解している。外用薬のステロイドも抗ヒスタミン剤も水虫の薬のすべてかゆみ止めと理解している。モルヒネに対する誤解。薬の副作用が怖く、薬は体に悪いのでなるべく飲まない方が良いと思っている。他の医療機関の受診を内緒にしているので、同じ作用の薬がダブって処方されている。症状が似ている他人（家族等）に処方された薬を飲んでいる。

このような背景を持つ高齢者の服薬を間違いなく、服薬のコンプライアンスを高めるのは至難の業ですが、いくつかの対応策が考えられます。

10. 取り敢えず処方どおりに薬を飲みやすくする。

一包化（ワンドーズパッケージ）により服薬を簡単にする。処方された薬を曜日や服薬時間ごとに小分けし、専用のピルケースに入れて管理する。

ただし、一包化（ワンドーズパッケージ）は服薬しやすい利点がありますが、処方を大まかにし、細かな服用ができなくなりますし、利用者は何をのんでいるのか判りにくくなりますので、処方する医師の同意が必要です。

ヘルパーステーションだいとうとしても検討を重ねて参りましたが、各種関係法令や平成17年10月4日に開かれたシンポジウム「医行為の解釈・訪問介護の現場から」などを参考にして方針を決定しました。

11. 情報の一元化、連携、報告

- ①主治医、訪問看護、ケアマネジャーなどの連携を確認し、強めて行く。
- ②服薬援助のマニュアルの見直しと周知徹底を図る。
- ③服薬援助を行う利用者の処方をステーションの責任者が把握する。
- ④現場のヘルパーが処方変更や追加の情報を入手した場合は直ちに報告する。
- ⑤必ず飲まないといけない薬や飲み忘れたら後からでも飲む薬と廃棄する薬などについてできる限り事前協議を行う。
- ⑥薬を飲む飲まないの利用者の自己決定の尊重について関係者間で協議しておく。

などです。

決められて通りに上手くいかないことが多い服薬ですが、処方の方針が主治医によって様々です。基本的には服薬のコンプライアンスを高める努力を行いますが、一方で服用に関する利用者の自己決定も尊重すべきで、服薬管理を行う医療者の方々にも服薬の大事さを利用者に理解して頂くためのさらなる働きかけを期待します。利用者の理解と医療者との連携が服薬援助にとって大切であるとの結論に達しました。私どももそのことを糧に利用者の利益が図れるよう支援して行きます。

ご意見をお聞かせください。